

(^_^)v 趣味に生きる (第33回) ~. ~. ~. ~. ~. ~.

楽器いじり～その2 シンセサイザー

菊池 春人

(慶應義塾大学医学部 臨床検査医学)

◆はじめに

前回の原稿についての反響はわずかのようにもありますが、かまわず予定通り後半を書かせていただきます。

今回はシンセサイザーについてといたしました。シンセサイザーというと、読者のみなさんはどんなことを思い浮かべますでしょうか。筆者の記憶をさかのぼると、モーグシンセサイザーによるスイッチト・オン・バッハ(実際買ったレコードはスイッチト・オン・バロックだったがバッハの方が有名)、ELP(エマーソン、レイク&パーマー; イギリスのロックバンド)のタルカス、富田 勲の月の光、ウェザー・リポート(アメリカのジャズ～フュージョンバンド)のブラックマーケット、YMO(イエロー・マジック・オーケストラ)のライディーン、喜多郎のシルクロードと続いています。いずれも高校時代から20歳代とかなり古いものばかりですが、その後はシンセサイザーも非常にポピュラーな普通の楽器としてJ-POPなどでも一般的になり、特にシンセサイザーを使ったことが前面に出てくることなくなくなったからあまり記憶に残っていないのではないかと思います。ちなみに、最近筆者が特にシンセサイザー演奏でファンなのが、ジャズピアニストの上原ひろみです(彼女のシンセプレイはジャズファンには否定的な意見も多いようですが)。ところで今述べた筆者のシンセサイザー体験は当初から「シンセサイザー」という用語で認識していたわけではなく、「電子音楽」という形だったように思います。それがい

つからシンセサイザーとなり、さらにそれを演奏したいと思うようになったかは記憶がはっきりしていません。ただ、いろいろな楽器をいじるのが好きでそのうえ電子もの、コンピュータが好きとなると、シンセサイザーを手に入れたい、演奏したいにたどり着くのは必然だったといえれば必然だったようにも思います。今のところは自分で音を作り出すことそのものより、いろいろな曲、シチュエーションに合わせて電子楽器っぽい音色を含めたいろいろな音色がだせることに興味のある中心があるような気がしています。以下、筆者の持っているシンセサイザーについて勝手に蘊蓄を語らせていただきます。

◆シンセサイザーとは

さて、みなさんはシンセサイザーとは何、と聞かれたらどのようにお答えになるのでしょうか。人によってとらえ方が違うのではないかな、と思っていますが、ウィキペディアでは「一般的には主に電子工学的的手法により楽音等を合成(英語: synthesize; シンセサイズ)する楽器」としています。ここでは2つのキーワードがあり、「電子(工学)的に音を作る」、ということと「楽器(演奏できる)」という2つです。確かにこれはシンセサイザーの必要条件だと思いますが、もう少し狭くとらえている考え方もあり、筆者もどちらかというこのとらえ方の方がよりしっくりきます。では、その狭い意味としてのシンセサイザーというのは何か、というと、少なくとも「いろいろな音色が出せる」ことが

必要条件で、さらには「自分で音色を作り出せる」ことが十分条件のような気がします。たとえば、エレクトーンは電子的に音を作り出す楽器なので、広い意味ではシンセサイザーになりますが、シンセサイザーとは呼ばないような気がします(個人の感想かもしれませんが)。となると、やはりいろいろな音色が出せる、選べることは必要条件のような気がします。ただ、これだと数千円の電子キーボードでも数十種類の音色を持っているものがあるため入ることにはなりますが、やはりシンセサイザーをいじっている人間としては、自分で音を作れるのが条件のように思うのですが、いかがでしょうか。

◆シンセサイザーの原理

では、シンセサイザーはどのようにして音を作るのでしょうか。シンセサイザーはどんな音でも出せる、と思っておられる方がいらっしゃるかもしれませんが、理論的には不可能ではないものの、現実的にはむずかしく、いくつかの方法音色を作っています。

1. 減算方式(図)

これが一番古典的な方法ですが、いまでも用いられている方法で、一般的にアナログシンセサイザーあるいはアナログモデリングシンセサイザーと呼ばれるものではこの原理を用いています。本格的なシンセサイザーがここからはじまった、といってよいものなので少し詳しく説明

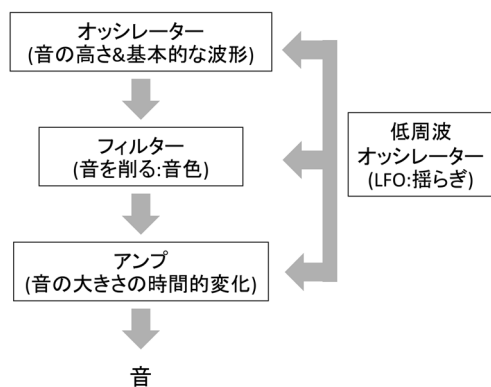


図 シンセサイザー(減算方式)の原理

します。

図にその概略を示しますが、音の3要素である高さ、音色、大きさをそれぞれオシレーター、フィルター、アンプで作りに出して調整していくもので、フィルターで音を削る(減らす)ので減算方式と呼んでいます。オシレーターでは、基本的な波形、例えば弦楽器などの音の元となるノコギリ波や管楽器の音のもととなる矩形波といった波形を選び、音の高さは通常鍵盤などで演奏時に変えることとなります(逆に音の高さを変えて演奏していることとなります)。フィルターにはある波長以上の周波数のみ通す(それ以下の周波数をカットする)ハイパスフィルターや逆にある波長以下の周波数のみ通す(それ以上をカットする)ローパスフィルターなどがあります。さらにカットしている周辺の波長の音を強調するレゾナンスというものもあり、これによってシンセサイザー独特のミョ〜ンという音が出てくるようになります。

あとは、音の大きさを調節するアンプがあり、音量は時間的に変化できる、楽器にたとえば、ピアノは鍵盤を押したときからだんだん音が小さくなっていくのに、オルガンは同じ音量で続くといった変化を作り出すことができるようになっています。さらに、オシレーター、フィルター、アンプのそれぞれを低周波で振動(揺らぎ)させる部分(LFO といいます)もある、という形になっています。図を見て文章を読んでもわかりにくいかもしれませんが…。この方式の特徴は、音の作り方の考え方が直感的でわかりやすい点にありシンセサイザーらしい独特の音を作れますが、実際の楽器の音のように複雑な音を作り出すのはむずかしいというところが欠点だと思います。

2. FM方式

ファミコンなどのあのピコピコした音にも用いられている方式で、特定の周波数をかなり高い周波数で変調(揺らす)ことによっていろいろな音を作るものです。小生はこの方式のシンセサイザーを持っていませんので、本稿では出てきません。この方式の特徴は、非常に特徴的な

音が作り出せる点ですが、直感的な音作りがむずかしいところが欠点といわれています。

3. サンプリング方式

(PCM (pulse code modulation) 音源)

楽器などの音をデジタルに録音(サンプリング)し、それを元に音を作り出す方式です。従って、かなり実際の楽器に近い音を出せることが特徴ですが、逆に自分の求める音を作り出す(音の変化)がむずかしいところ、つまり自由度が少ないところが欠点かもしれません。1から音色を作り出す、というものではない、ということにもなるかと思えます。

4. 物理モデリング方式

楽器が音を出している構造や方式から出るはずの音をコンピュータ上で仮想的にシミュレートして合成し音を作り出すものです。パラメータを増やせばある程度楽器に近い音色が出せるのと、仮想的な楽器、例えばフルートとオーボエを組み合わせた楽器の音、といったものも作り出せるのが特徴です。ただ、パラメータを調整して音を作り出すのはかなり習熟が必要であるのと、計算量が多いので装置が複雑となり、和音を出すためには非常に高価となってしまうため、現在はごく一部の機種を除いて用いられていません。ウインドシンセサイザー(管楽器的なシンセサイザー)には比較的向いている方式といわれ、後で出てくる VL70-m はこの方式を用いています。

◆シンセサイザー1-学研 SX-150

これは写真1に見るようにはたして楽器といってよいか、というより演奏するのはかなりむずかしいので、最初に述べた定義からするとシンセサイザーとはいえないのかもしれませんが、原理はまさしくアナログシンセサイザー(減算方式)であり、シンセサイザーとして売られている(というか付録になっている)ものなので紹介しておきたいと思えます。

実はこの SX-150 は 2008 年に発行された大人の科学マガジン別冊「シンセサイザークロニクル」の付録です。大人の科学マガジンはご存じ



写真1 学研アナログシンセサイザー SX-150

の方もいらっしゃるかと思いますが、大人ごころをくすぐる科学付録、たとえば録音再生ができる蓄音機やピンホールプラネタリウムなどがついているのが売物の雑誌です。付録といってもおそらく価格の大部分は冊子ではなく付録が占めているのではないかと、いうものでむしろそちらを目当てで購入している人も多いと思います。筆者もそれに近い形でこの雑誌別冊を買っています。

簡単ですが、一応組み立て式となっていて、基盤、スピーカーやカーボンパネルなどをネジで留め、ツマミをつけて出来上がりです。単3電池4本使います。ボタンを切り替えたり、ツマミを回したりして音色を作り、下の方に横に細長い黒い部分のカーボンパネルを電極棒で触ることで音がでて、その位置によって音の高さが変わります。写真のものでは電極棒がついていません。電極棒はテスターの電極棒と同じものですが、筆者の買ったものが不良品だったようで接触が悪く、カーボンパネルを触っても音がでないため、電極棒をとって直接電線で鳴らしていました。先に述べた減算方式の図に対応させると、それぞれ白い線で囲まれている部分が写真に記入したとおり、CUTOFF のツマミと RESONANCE のスイッチの部分でフィルター、ATTACK と DECAY のツマミがアンプ、LFO WAVE のスイッチ、LFO RATE のツマミが低周波オシレーターとなっています。コスト削減

のため、オッシレーターの波形を選ぶことはできないので、オッシレーターはパネル上表示されていませんが、回路としては存在して、音の高さは前述のようにカーボンパネルに触れた電極の位置で決まります。雑誌の方にはギターや管楽器、あるいはネコの鳴き声の設定例が出ていますが、なかなかそれらしくはならないように思います。まあ、雑誌・付録で3,360円(税込)なのでしかたがないかもしれません。これでシンセサイザーの原理が理解できるかと思ったのですが、古典的なものから経費削減のため少しアレンジしてあるところもあり、その目的ではあまり役に立たなかったような気がします。ただ、実際シンセサイザーに興味があり、触れてみたい、理解したい方は雑誌の方の内容も含めて3,360円で今でも書店で頼めば購入できるのでごく、とまでは言わないものの、それなりにお勧めではあります。

◆ウインドシンセサイザー

筆者がシンセサイザーとして購入したのは、一般的なキーボードで演奏するものではなく、このウインドシンセサイザーが最初でした。ウインドシンセサイザーという言葉をご存じない方も多いかと思いますが、後に出てくる写真を見ていただくとわかるように、いわば吹いて演奏するシンセサイザー、つまり管楽器ということになります。なぜ、ウインドシンセサイザーが最初に購入したシンセサイザーになったのか、というのは自分でもあまり意識はしていませんが、たぶん管楽器が好きであること、普通の人があまりいじらない(ちょっと珍しい)シンセサイザーとして興味があったから、ということだと思います。ウインドシンセサイザーは基本的に単音(EWI4000sは一部2音を出すことも可能)ですが、息の強弱を中心として管楽器としての表現力があるのが、鍵盤楽器に比べての特徴といえます。現在3台所有しており、ヤマハのものが2台とアカイプロフェッショナルのものが1台です。

1. ヤマハ WX11 と WX5(写真2)

この2台は正しくはシンセサイザーではありません。本体の中に音を出す仕組みがないため、音を出す装置(音源)が別に必要となります。つまり、これらは単なるコントローラ(スイッチのかたまり)ですが、音源をつなげてシンセサイザーとして用いるので、一応ウインドシンセサイザーとして扱われることが多いと思います。ヤマハではウインド(Wind) MIDI コントローラと呼んでいます。MIDIはMusical Instrument Digital Interfaceの略で電子楽器のデータをやり取りする際の規約のことです。Windは通常「風」と訳されますが、「息」や「呼吸」の意味もあるので、吹いて電子音源をコントロールするもの、といったものになると思います。

写真左側の黒くてやや細い方が最初に買ったWX11で、右側の銀色の方がWX5です。なぜか後から発売されたWX5の方が数字が若くなっています。WX11を入手したのがいつ頃だったかよく覚えていなかったのですが、発売時期などいろいろと調べてみたところでは1996年から1998年の間のようなので15年以上前ということに



写真2 ヤマハ WX11(左)と WX5(右)



写真3 WX11とWX5の専用音源 ヤマハ VL70-m

なります。WX11の方が見た目は電子楽器っぽくって好きなのですが、やはり機能的には後継機のWX5の方がいくつかの点で改良されています。WX5も購入時期の記憶があまりなく、おそらく10年ぐらい前ではないかと思えます。どちらも専用の音源としてVL70-mを使っています(写真3)。WX11はVL70-mかそれより以前に販売されていた装置がないとコントローラーとしても使えませんが、WX5は一般的なMIDI端子があるので、VL70-mでなくとも音源に接続することができます。逆にVL70-mにも一般的なMIDI端子があるので、MIDI対応の演奏装置であれば接続して音源として用いることができます。VL70-mは物理モデリング方式の音源で、mはおそらくモノフォニックシンセ、つまり和音は出せず、単音しか出ない、というところから付けられているものだと思います。管楽器なので和音が出せなくとも十分である、ということでウインドシンセ用の音源として用いられているわけです。結構面白い音色があります。ただ、自分で音色を作ったり、調整したりするのは理論的にもかなりむずかしく、また、画面、ツマミなどの制約からパラメータの入力がめんどろなため、ほとんどやったことはありません。現在残念ながらVL70-mは製造中止になっています(人気はまだ結構あるようですが)。

演奏方法はどちらも全く同じで、クラリネットなどをイメージしていただければよいと思いますが、息を吹き込むと音が出るようになり、キーを押さえることで音程が変わります(正確に言えば音を出す信号が出るということになり

ますが)。キーは見ての通り、ほぼフルート、サクソホンなどの木管楽器と同じでさらに電子楽器である分、指使いの自由度がかなり高くなっています。また、リードがあって、それをくわえることによって音程が少し変えられます。

2. アカイプロフェッショナル EWI4000s

(写真4)

これは比較的最近(約1年前)に購入したものです。WXシリーズよりも入門書が多く、また、プロが実際に演奏しているCDなどもあるので気になっていたのですが、バッグやアンプがサービスで付くキャンペーンをやっていたので思わず買ってしまいました(笑)。

ちなみに写真4-左は専用スタンドに立てている所です。EWIは「イーウィ」と発音することになっていますが、electronic wind instrumentの略で、電子的管楽器という意味になると思います。EWI4000sは音源も入っているので、これ単独でシンセサイザーと呼ぶことができます(本体に音源が組み込まれた最初のウインドシンセサイザーだと思えます)。アカイプロフェッショナルでは他にもEWIのシリーズの楽器として、音源がなく、コンピュータにUSB接続して用いるEWI USBというのを販売していましたが、つい最近(2014年の3月)販売終了になったようです。音源が入っている分ヤマハのWXシリーズと比べてかなり重く、ストラップで支えないと演奏は困難です。このシリーズの特徴はキーがタッチキーになっているので、触るだけでそのキーを押したことになる、というところにあります。したがって機械的な部分がない



写真4 アカイプロフェッショナル
EWI4000s (左)と演奏風景(右)

ことになりますが、通常管楽器はキーの上に指を置いていることが多いので、むしろ触ってしまっただけで音が出ることに慣れが必要です。また、WXシリーズは通常の管楽器のように吹き込んだ息が抜けるのですが、EWIシリーズは息がほとんど抜けないため、慣れないと結構疲れる感があります。

演奏しているところを写真4-右に示します。音を作り出す方式は減算方式(アナログモデリング)になっています。ですので、実際の楽器とそっくりな音色は出ませんが、それなりに面白い音色があらかじめ組み込まれています。なお、コンピュータと接続してコンピュータ上で音色を作成するソフトがあります(まだ試してはいませんが)。

3. WXかEWI4000sか

形や運指の点からはWXシリーズの方が好きなのですが、運指については慣れもあるかとは思いますが。逆にいえばまだEWIには慣れておらず、現状ではWXシリーズの方がうまく演奏できます。ただ、EWIの大きなメリットは音源が別に必要なく電池で作動するので、電池で鳴るアンプ+スピーカーがあれば100ボルト電源がなくとも演奏ができるという点です。一方、WX5

は電池で作動する音源とスピーカーが必要になります。機能的にもEWI4000sの方はオクターブ、通奏低音で2つの音が出るとか、グライド(ポルタメント:ある音から音程の離れた音へ音の高さが連続的に変化していく)の変化がつけられるとかといった点で優れています。

また、先にも書きましたがプロが演奏しているCD付きの教則本があり、その模範演奏は十分音楽として聞くことができます。さらにはクラリネットアンサンブルの女性カルテット、カラフル(Colorful)がELECTRIC COLORFULというEWIでの演奏を集めたCDアルバム(一部クラリネットとのアンサンブル)を出していて、これは結構気に入っています。ということで、このところはもっぱらEWI4000sを練習しています。一度ある会で披露したのですが、今一步というところでなんとか機会を見てきちんと評価されるぐらいの演奏を披露したいと思っています。いずれにしても、ウインドシンセサイザーは接続さえきちんとできれば、誰でも音を出すことができると、運指も簡単なので、何か楽器をやってみたいが鍵盤は苦手、という方にお勧めできると思います。

◆キーボードタイプ

1. コルグ M3 & radias (写真5a~c)

写真5(a)を見ていただくと、おそらくこれが一番(楽器としての)シンセサイザーらしいと思われるのではないのでしょうか。これは、本来M3-73というシンセサイザーにradiasという別のシンセサイザーの音源部分だけを載せたものになっています。

筆者における歴史(順序)はまず、radiasの音源だけ買って、後からそれが載せられるM3-73(73は鍵盤の数)を買って取り付けた、という順番です。写真5の(b)と(c)にM3とradiasの音源部分を示しており、この両方が(a)のようにセットされていて、ひとつの鍵盤で両者から音が出るようになっています。見かけがかなり違うことに気がつくられると思いますが、M3の方がサンプリング方式(PCM音源)でradiasの方が減算

(a)



(b)



(c)



写真5 コルグ M3+radius (a) と音源部分の拡大 M3 (b) radius (c)

方式(アナログモデリング)になっていて、この原理の異なる両者を組み合わせることで音色の幅がかなり広がって無敵になる(笑)、と思ってこのような組合せとしています。radius のパネルには写真では分かりにくいかもしれませんが、先に記した減算方式のオシレーター、フィルターなどが書いてあります。具体的には実際の楽器の音色あるいはそれに近いものがほしいときには M3 を使い、いかにも電子音的な音色のときには radius を使うということになります。音はそれぞれのユニットで別に出力されるので、両方の音を重ねるときにはミキサーが必要になります。どちらもプリセットの音色(メーカーであらかじめ作成されている音色)がかなり豊富で、さらにそれを組み合わせたプログラムもあるため、それらをチェックしているだけでもかなり時間がかかるというか、飽きがこない、

といったところで、音色を作るとこまではどりつかないのが現状です(あまり自分で新たな音色を作る必要性が少ないのもあるのですが)。M3 はシンセサイザーとしては特徴があまりなくて、前面に出して使用しているバンドは少ないように思うのですが、ミュージシャンの後ろでサポートするバックバンドの中ではよく用いられているようで、サイモンとガーファンクルとマイケル・ジャクソンのバックバンドで使用しているシーンを確認しています。一方 radius は特徴的な音色が出せるということで筆者としては気に入っています。

これらを組合せた M3+radius の大きな欠点は想像していたより遥かに重いことです(20kg 以上あります)。筆者の家は集合住宅で狭いため、キーボードを常に出しっ放しにしておくスペースがなく、通常はケースのなかにしまっていて、

演奏するときにスタンドの上に設置するのですが、この時の出し入れがひとりで行うのは半端でなく大変で、足の上に落とせばけがをするし、また、落として破損してしまうのではないかと心配があり、そのため演奏の機会が減ってしまっています(さぼっているいいわけでもありますが…)。子どもたちが独立して家が広く使えるようになったら出しっ放しにできるかなとも思っているのですが、もう少し先になりそうで、それまで壊れないでいるかどうかは微妙かもしれません。運搬には絶対車が必要ですが、どこかで披露したいとは思っています。でも、そのチャンスはあまりないかも…。

2. ローランド AX-Synth(写真6)

これはキーボードタイプのシンセサイザーですが、写真のとおり肩から下げて演奏するもので、ショルダーシンセサイザーと呼ばれています。ショルダーシンセサイザーは和製英語のようで英語では keytar (keyboard と guitar の合成語だと思います)と呼ぶようです。基本的に鍵盤を弾くのは右手のみで左手は音に変化をつけるためのスイッチを操作するようになっています。もともと、ロックバンドなどのキーボード奏者がステージで動き回って演奏するために作られた、という話があります。AX-Synth は鍵盤数が 49 でローランドでは、この後に 37 鍵の



写真6 ショルダーシンセサイザー
ローランド AX-Synth

Lucina というのも発売しており、こちらの方は一部機能が追加されているところもあるのでこちらにするか少し悩んだのですが、見た目がややおもちゃっぽいのと、鍵盤の数、もともと装備されている音色数が多いことから AX-Synth にしました。購入したのは昨年(ヨドバシ・ドット・コム)で今のところは一番最近買った楽器です。

発音原理は PCM 音源で、とくにスーパーナチュラル音色といって、バイオリン、チェロ、尺八、トロンボーンについては生楽器にかなり近い音色のものを備えています。AX-Synth もコンピュータと接続して音色を編集するソフトがあるようです(これもまだ試していません)。これを購入したのは、前項のコルグのキーボードシンセサイザーがあまりに重いため、すぐに演奏できないのでさっと演奏したいときのためと、電池で動作するので外で演奏、特に歌の伴奏をするときに便利ではないかと思ったことによります。近くその機会があるとよいのですが…。

◆コルグ KAOSILATOR と KAOSILATOR PRO(写真7)

この2つはシンセサイザーの狭義の定義とした、「自分で音を作り出す」という点では当てはまらないものの、ダイナミック・フリーズ・シンセサイザーと称して販売されているので本稿に含めたいと思います。写真向かって右の小さ



写真7 コルグ KAOSILATOR(右)と
KAOSILATOR PRO(左)

くて黄色い方が KAOSILATOR で左の黒い方が KAOSILATOR PRO です。シンセサイザーといっているのは、いろいろな音色のシンセサイザー音源を内蔵しているからだと思います。タッチパッドを指で触ることで音が出るのですが、その位置によって音の高さ(主に X 軸方向)や音色(主に Y 軸方向)が操作できます。なお、音の高さと位置の関係は固定ではなく、音階として長調、短調の他ギリシャ音階、琉球音階などを設定できます。楽曲の一部分(フレーズ)を録音してそれを繰り返し再生しながらさらに重ねて別のフレーズを録音していくという繰り返しによって、比較的簡単な操作で演奏、作曲ができるというものです。どちらもスピーカーがないので、これ単独では音が出ません。KAOSILATOR の方は特に発売当時「いままでなかった手のひらサイズの超コンパクト・サイズ・シンセサイザー」をキャッチフレーズにそれなりに流行ったもので、ネットでも演奏している動画があり、面白そうと思って購入しています(多分 6, 7 年前)。確かにいじっていると面白いのですが、手のひらサイズ(10×12cm)の本体のタッチパッドですから、なかなか正しい音を出して曲を演奏するというのは困難です。

その点では KAOSILATOR PRO の方がタッチパッドが広いので演奏できるかな、と思っていたところ、秋葉のヨドバシカメラで展示品処分安く売っていたので思わず衝動買いしてしまいました。ただ、さすがに展示品で思っていたより使い込まれており、また後で考えてみればわかるのですが、展示品処分した背景には新機種が出る、ということがあったので、値段もそれほど安くなかったことを合わせて安物買いの銭失いだったかと反省しているのが正直なところ。こちらは電池駆動ができないため、100 ボルト電源が必要である、という点が欠点でこれはかなり大きな問題だと思います。ただし、機能的には KAOSILATOR よりかなり優れているのと、ある程度の演奏は可能というメリットはあります。でも、やはり楽器として演奏できるかというところとちょっとむずかしく、ネタとし

てちょっと、という程度かと思います。なお、現在はこちらも後継機の kaossilator2(外見はスマートフォンに近い; なぜかこちらは小文字→小ささを強調している??), KAOSILATOR PRO+となっています。

おまけですが、コルグでは iPhone やニンテンドー 3DS で動作するシンセサイザーのソフトも出していて結構流行っているようです。

◆番外編 ソフトウェア・シンセサイザー

一般的には楽器とはいえないので、番外編としました。コンピュータのソフトウェアとしてのシンセサイザーで、現在はかなり多くのものがあります。最初に述べたいろいろな原理をソフトウェアで実現しており、昔の有名なシンセサイザーをシミュレートしたものも人気です。中にはコンピュータ (Mac) だけで演奏しているグループもあるので、楽器といえないこともないのですが、リアルタイムに演奏するためには通常なんらかの演奏用の装置としてキーボード(ウインドシンセサイザーも可)を接続する必要があります。

ソフトウェア・シンセサイザーの大きなメリットは、好きなシンセサイザーを(容量さえあれば)いくらでもコンピュータ内に装備できるということにあります。一方、ハードウェア・シンセサイザー(単体で演奏できるシンセサイザー)は 1 台が持っている発音方式は通常 1 つ(なかには 9 つ、なんていうものもありますが、せいぜいその程度)なので、いろいろな方式のものが必要な場合、複数台を使用することになってしまいます。また、コンピュータで楽曲を作成する際にはコンピュータ内で完結できることもメリットとなります。ただ、欠点はハードウェア・シンセサイザーのように、電源を入れてすぐ使えるようにはならないことやどうしても安定性に不安(コンピュータトラブルの可能性)があるといった点があります。音色についても一般人が聞いてわかるレベルではないものの、通が聞くとハードウェアの方がよい(太い)といわれています。

筆者は数年前一時いろいろなシンセサイザーが入手できるということでソフトウェア・シンセサイザーに凝って買い込んだ時があるのですが、コンピュータで音楽をつくることより演奏することに目的があったので、それほど使わないうちになんとなく古くなりつつあります。コンピュータのOSの方がどんどん変わっていくため、ぼちぼち使えなくなっているものも出ていて、アップデートをするかどうか悩みどころです。なんとなく、また近く衝動買いしそうな予感もなくもないのですが…。

◆おわりに

いかがでしたでしょうか。本稿がシンセサイザーについて親近感・興味を持っていただくことにつながれば筆者としては大変うれしいのですが、そこまでうまく原稿が書けているかどうかの自信はあまりありません。とりあえず、何かの折りにお声がけいただき、ご披露させていただければとは思っております。電子楽器は夜中でも外に音を出さずにヘッドホーンで演奏できるというメリットがあり、がんばって練習いたしますのでよろしく願いいたします。それまで修行しないとはいけません…。

読者の方にはさまざまな趣味をお持ちの方がおいでかと思えます。
編集室では本コラムへのご投稿を心よりお待ちしております。